

コミュニケーション能力の育成に向けた外国語活動・英語学習

附属小・中学校における外国語活動および英語科では、これまで「思考力・判断力・表現力」を「学び合い」を通して育成することを目指してきた。昨年度からはさらに、「学びをいかす」子どもの姿を求めて研究を進めている。以下、これら三つの観点についてその概要をまとめておく。

観点1 外国語活動・英語科における思考力・判断力・表現力について

この観点は、活動や学習の「内容」に関するものであり、思考力・判断力・表現力はそれぞれ「場面や状況を多面的な視点でとらえ、伝えようとする事柄を言語的なルールに則って考えることができること」、「場面や状況に応じて、言語材料や伝え方を選択し、使い分けることができること」、「思考・判断を通して、場面や状況に応じた最適な方法で相手に伝えることができること」と定義される。共通しているのが「場面や状況」という文言である。これは、英語を用いた活動や学習が実際の言語使用との関連において行われるべきものであることを示しており、中学校学習指導要領における「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」という方針とも合致する。

思考力における「言語的なルール」には、狭い意味での文法規則や語彙・表現に加えて、言語運用に関するメタレベルの知識（接続詞を使うと論理的に表現できる、助動詞を使うことで丁寧な気持ちは表すことができる、など）も含まれる。中学校の英語科では、学習が進むにつれてこれら言語的ルールが累積し、それにとまって判断力や表現力が豊かになっていく。他方で、スキルの育成を目的としない小学校外国語活動においては、言語的ルールは「こういう場面ではこのような表現を使う」という定型表現の知識に相当する。

観点2 外国語活動・英語科における思考力・判断力・表現力を育成する学び合いとは

この観点は、活動や学習の「方法」に関するものである。言語を用いたコミュニケーション活動が本質的に対人的なものである以上、実際の言語使用を意識しながら行われる外国語活動や英語学習は、多かれ少なかれ「学び合い」の要素をもっているといえる。英語科においては、思考力・判断力・表現力を育成するための学び合いは、(i) 知識を定着させる段階において、ペアワークなどによって互いに練習に協力させる、(ii) 知識を拡張させる段階で、他者の言語知識や言語運用能力をまねして学ばせる、(iii) 知識を深化させる段階において、互いの知識・技能を合わせて課題の解決に取り組ませる、といった手法が考えられる。このうち、(ii) と (iii) については、直接的に英語を使用しない学び合いの学習もあり得るだろう。例えば、外国語活動においてさまざまな「ことばへの気付き」を発表したり、英語科において、類似した言語形式（例えば現在完了形と過去形）の機能の違いを少人数集団で話し合わせ、そこから使い分けの規則を発見させたりする活動は、学び合い学習の一形態である。

観点3 外国語活動・英語科における学びをいかすという事

この観点は、活動や学習の成果をどのように「運用」するかに関するものである。一般に、言語に関する能力は静的な「言語知識」とその使用に関する「言語運用力」に大きく分けられるが、本校で育成しようとしている英語の「思考力・判断力・表現力」はこれらとともに含んだ概念である（上述の定義を参照）。したがって、外国語活動・英語科においては、学びをどういかすか一すなわち英語の知識をどう「運用」するか一は「思考力・判断力・表現力」の外側ではなく、むしろその内側にある問題であると考えてよい。

今後の研究の焦点は、運用力を育成するためにはどのような課題の設定が有効か、ということになる。課題解決型の学習は、児童・生徒が「今、何のためにこの表現を勉強しているのか」を意識しやすく、学習者の動機付けを高める効果が期待される。しかし特に中学校の英語科では、課題を解決するという結果のみに重点が置かれると、言語表現の正確さが損なわれたり、知識が十分に定着しないまま学習を終えたりすることも懸念される。これらの特性を踏まえた上で、課題解決型学習の可能性を探っていきたい。

（共同研究者：島根大学教育学部言語文化教育講座、縄田 裕幸・猫田 英伸）